

## デジタル・ライティング時代のグラマトロジー ：アジア記号論への貢献

石田 英敬（東京大学名誉教授／  
Asian Semiotics International Association (ASIA) 名誉会長）

### 発表要旨：

本発表は、ジャック・デリダのグラマトロジー概念を、デジタル書記技術によってもたらされた変容を踏まえて再検討するものである。とりわけ、日本語や中国語の表語的書記体系に代表されるアジアの記号論的伝統に焦点を当てる。

ソシユールの音声中心的言語学は、実際には音声の記録と分析を可能にした音声書記技術 (phonographic technologies) に支えられていた、という仮説を出発点とし、「表語的間隙 (logographic hiatus)」や「文字学的ポリフォニー (grammatological polyphony)」といった独自の概念を導入し、アルファベットの線形的な書記モデルの限界を問い直す。

さらに、スタニスラス・ドゥアンヌの「神経再利用仮説 (neuronal recycling hypothesis)」に依拠しながら、「神経文字学 (neurogrammatology)」の枠組みを構想する。これは書記体系を、脳における視覚的・運動的・意味的な処理の協調的なオペレーションのなかに位置づけ学際的視座から、表語的書記体系の認知的特殊性、その身体性や多感覚的な側面を理論化することが可能となる。

また本発表では、ローマ字やピンインなど、ラテン文字ベースの入力方式 (IME) や音声認識 (ASR) 技術への依存が強まっている現状に対しても批判的視点を提示する。これらの方式は、デリダが「世界ラテン化 (mondialatinisation)」と呼んだプロセス、すなわち書記のグローバルなラテン文字化に参与しており、非アルファベット言語に対して、音声中心的・アルファベット中心的なパラダイムを押し付けることにつながる。この過程は、アジアの書記伝統が有する認識論的豊かさを覆い隠してしまうものであり、デジタル書記の再評価を文明論的観点から行う必要があることを示唆する。

さらに、日本語の仮名表記を手がかりに、「モーラの差延 (moraic differance)」の問題を提起する。これは弁別素性→音素→音節→形態素へというアルファベット起源の線形的エクリチュール観を脱構築する次なる文字学的ポリフォニーの素描である。

こうして本発表は、アジア的記号論の立場からグラマトロジーを再構築することによって、デジタル時代における書記の理論を新たに構想し直す試みに貢献することを目的とする。

キーワード：文字学 (グラマトロジー)、表語的書記体系、モーラ言語の仮名表記、神経文字学、世界ラテン化、アジア記号論

### 参考文献：

Ishida H. Grammatology in the Era of Digital Writing. *EPISTÉMÈ*. 2025;33.4.  
<https://doi.org/10.38119/cacs.2025.33.4>